

氏 名	くら いし いち ろう 倉 石 一 郎
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 108 号
学位授与の日付	平 成 12 年 7 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 人 間 ・ 環 境 学 専 攻
学位論文題目	語り(直し)の实践としての人間形成 ——日本社会の朝鮮人マイノリティにおける「自己」の構成をめぐる——

論文調査委員 (主 査) 教授 岡田敬司 教授 鯨岡 峻 教授 高橋由典 教授 小山静子(立命館大学)

論 文 内 容 の 要 旨

「語り(直し)の实践としての人間形成」と題する本学位請求論文は、日本社会における朝鮮人マイノリティの状況を素材として、その特有の社会状況の中での自己の語りと他者の語りの絡み合いの中から、いかに「自己」が構成されてくるかを理論的かつ実証的に考究したものである。

第1章の序から第8章の結論に至る全体は大きく三つの部分からなっており、第1部では「在日朝鮮人教育」の实践記録のテキスト分析が主な内容である。1970年前後の大阪市における潮流の大きな変化(逸脱生徒管理者の語り方から社会的マイノリティの人権教育の語り方へ)を追跡し、分析している。

ここで申請者が指摘するのは、管理者の語り方で教育がなされていた60年代では悪い生徒/良い生徒という境界線を人物の外部に引くことができていたのに、70年代の人権教育の語り方では「同じ人間」の悪い部分と良い部分(荒れと沈静)というふうに、内部に境界を引かざるを得なくなったことである。これは逆説的にも、教師と生徒との全人格的なつき合い方をやりにくくしてしまった(いわゆるワルとも全人格的につき合うことができていた)と申請者は指摘して、これが必ずしも直線的な教育の進歩とは言えない部分を含んでいたことを強調している。

第2部は「在日外国人教育」実践校でのフィールドワークの経験に基づいている。このいわゆる拠点校で申請者が見聞したものは、肯定的なものではなかった。それは教師と子どもの教育的な交渉の定型化であり、生徒の評価、指導全般についての定型化、更にはフォーマルな装置としての「授業研究」の場の定型化であった。それらは先入観にとらわれた結論ではなく、それらの先進的な拠点校でなされている在日外国人教育の諸々の実践処方箋の積み重ねを一つ一つ追跡していく中で、申請者を捉えていった実感として述べられている。

第3部は「ライフ・ストーリーの中の<私>」と題されている。第1部、第2部が学校教育場面での教師と生徒のかかわりの中での<私>の構成であったのに対し、この第3部は青年期以降の主として学校外での<私>の語り合いや聞き合い、そして評論のし合いの中での自己像形成の様を研究している。ここでは教育者の側からの権力的な作用が薄れ、著しく自由で自律的な自己構成がなされているように見えるのであるが、ここにも擬似権力関係が働いていることが申請者により指摘されている。人は孤独で内省的に物語ろうとも、サークルで仲間たちと共に物語ろうとも、そこにストーリーの展開方向を予想して、それを聞くのを期待する他者を立ててしまう。あるいは内面に想定してしまう。申請者はこれを「伝記作者的他者」と名づける。若者の語りはどうしても、この半ば出来合いのストーリーの期待、伝記作者的他者の欲望に應えてしまい、からめ捕られてしまう傾向がある。無論、こうしたライフ・ストーリーの語りにも初心者から熟達者への道があり、たやすく伝記作者的他者の欲望にからめ捕られてしまうものから、それらの促しや期待をずらしつつ応えていく中で自らを語るものまで幅がある。こうした考察を経ながら申請者は「自伝を語ることの解放が意味するのはそれを完結しないままにとどめておくことだ」と結論する。内的にしろ外的にしろ、ライフ・ストーリーの語りは伝記作者的他者との終わりのない協同無しにはなされ得ないと指摘している。

教育的かかわりを担う大人が、子どもに＜声＞を与え、子どもに成り代わって＜語る＞ことで子どもの自己を造形していくという原型は、他律から自律へ移行するに従って根本的に廃棄されてしまうのではなく、仲間との語りや内省として、形こそ変われ、連綿と続いていくことを実証し、かつ、その意味を解明した。

尚、序章は現代社会において、なぜ教育問題その他において「自己」の問題、アイデンティティ・ポリティックスが重大になってくるかを論じ、終章において、現時点での申請者の解決の見通しを述べている。それは「対話哲学」的な自己の語りを遠望するものである。

論文審査の結果の要旨

「語り（直し）の実践としての人間形成」と題された本論文は、多文化的な状況に直面する現代社会論の一翼を担う教育社会学的自覚の下に、それを大人と子ども、自己と他者のミクロな相互作用の綿密な分析の積み重ねから、現代における人間形成の言語的、心理社会的側面と、それを包含し、組織だてる教育装置のあり方を探ろうとする意欲的な研究である。

在日朝鮮人をはじめとするマイノリティの自己構成が素材とされたのは、この部分において特に大人・子ども相互関係に社会的、権力的圧力が凝縮されるからであるが、申請者は1960年代以降の在日朝鮮人教育の変遷をたどる中で、マイノリティ（の子ども）をめぐる語り方の移り行きを的確に捉え、これを現代社会における人間形成論一般に対する重要な参照点として提供することに成功した。とはいえ、生徒管理から人権擁護への指導基調の推移は一定の進歩ではあるものの、それ自体教育の完成ではなく、後に述べられるような「生成する自伝」につながっていかなければならないとされるのである。

第2部で述べられた「在日外国人教育」実践校でのフィールドワークの結論は残念ながら悲観的なものであった。これがマイノリティ教育を制度化した場合、不可避的に付随してしまう欠陥なのか、それとも他にこの事例特有の条件が絡んだ結果そうってしまっただけなのかの解明はまだ十分とは言い難い。自己の語りの定型化を悪しきものとする申請者の根本仮説に修正を促す要素が隠れていないかも一考の余地があろう。

第3部「ライフ・ストーリーの中の＜私＞」は申請者が長年にわたって行ってきた在日朝鮮人たちの自己の語り、生活の語りのインタビューの分析である。初期のころの扱いと違って、本論文では、これを現存する、あるいはしない共同体の仲間との語り合いとして定式化し直しているのが目につくが、これは、自己形成を語り直しのプロセスの中で、それも（内あるいは外の）他者たちとの語り直しのプロセスの中で捉えるという本論文の根本モチーフに基づくものであり、これは成功していると思わせる。少なくともこの方法のおかげで、幼い時の大人との語り合い、学校での教師との語り合いと連続した構造を持つものとして青年期の自己の語りを捉えることが可能になったのである。

我が国における「心の教育」の強調や、現代社会一般におけるアイデンティティ・ポリティックスの重要性の意味が序章で述べられ、終章で「対話哲学」的な解決が遠望されていることは先に述べた通りである。しかし、この「対話哲学」的な解決の中味が、自己が他者との協同の語り合いのあくなき追求のなかでの「徹底した定型化の拒否」としてしか述べられていないことは、実証的検討の積み重ねに基づく研究であるだけに、物足りなさの感を否めない。

とはいえ、臨床諸科学と並んで「他者との（言語的）相互作用における自己の構成」を教育科学の中心テーマに据え、その理論的かつ実証的解明に寄与した意義は大きいと言わねばならない。

本申請者が所属する人間形成論講座の目的の一つは、社会的、文化的環境における人間形成の機序を解明することであり、本研究はこの目的に沿ったものと言える。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成12年6月15日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。